

学 位 論 文 題 名

“To Leave Life on this Earth”:
The Development of Katherine Mansfield's Aesthetics

（「この世に人生を残すこと」：

キャサリン・マンスフィールドの美学の発展）

学位論文内容の要旨

＜第1章＞ マンスフィールドは『前奏曲』において初めて独自の芸術の世界を描いたが、その基礎は作家を志してから『前奏曲』の草稿『アロエ』を書くまでの修業時代に培われた。本章では彼女が後の芸術の土台となる象徴派的表現と表現形式の自由をどのように習得したかを明らかにしている。

英国留学後 1906 年にニュージーランドに帰国したマンスフィールドは、再び渡英するまでの期間に何をどのように芸術として表現するかを探求した。彼女が先ず手本としたのがオスカー・ワイルドで、彼が描く芸術的人生に惹かれた。その後、具体的な芸術目標を必要とするに至ると、アーサー・シモンズとウォルター・ペイターの象徴主義を学んだ。この頃参加した母国の未開拓地への旅は、物事の本質を外的事物によって表す象徴主義とそのための感性を深めるよい機会となった。論者はこのときの大自然の中での経験を記したノートから後の作品の背景やイメージの起源を引き出している。また、この頃の作品における象徴派的なムードやイメージの分析も行っている。

1908 年の再渡英後、彼女の美学に影響を与えたのは芸術誌“*Rhythm*”である。“*Rhythm*”はフォービズムを支持していたため、マンスフィールドもその自由で直観的な表現の影響を受け植民地の物語を書いた。その一つ『オール・アンダーウッド』は象徴派の手法を生かしながら、リズムや色彩のライトモチーフによって作品全体が主題の野蛮さを表している。論者はこの作品分析によって、マンスフィールドが伝統的な形式にとらわれない表現の自由を身につけたことを検証している。

＜第2章＞ 1915 年マンスフィールドは再会した弟との思い出話に触発され『アロエ』を書いた。『アロエ』は 1917 年に『前奏曲』として完成された。『前奏曲』はマンスフィールドのニュージーランドでの子供時代の思い出に基づいているが、象徴派的表現法と新しい形式による独創的な物語である。この作品で彼女は平凡な家族の“truth”を描く構想と、その表現のイメージを具象化した。本章は『前奏曲』の各登場人物を通して描かれている“truth”とは何か、またそれがどのように一つの世界に統合されているかを考察し、初めて具現化されたマンスフィールドの美学を明らかにしている。

『前奏曲』は起承転結がなく 12 の断片から成り、シンボルのアロエとそれによる“moment”を中心にして登場人物の意識やイメージによって“truth”を喚起する構成である。

それ故に霧の中から家族が次第に現れるかのようなマンスフィールドがイメージした通りの印象を与える。物語では3人の登場人物、Burnell 家の Kezia、Linda、Beryl の心象が引越という出来事を通して現れる。マンスフィールドは自らが認識した意識の起源、自己の分裂等の人生の現実を3人の個々の"truth"に投影しながら、彼女自身の自己開花の信条を人生における希望を暗示する"moment"として表し作品を統一している。従って作品全体がマンスフィールドの感性が捉えた人生の"truth"を伝えているのである。論者はこうした『前奏曲』における美学を分析し、この作品を当時の散文における画期的な物語として再評価している。

<第3章> 1918年マンスフィールドは自らの病と戦争という精神的危機に遭う。これによって彼女はモダニストの使命に目覚め、彼女が「悲劇的な認識」と呼んだ伝統的価値観を失った時代の"truth"を新しい方法で表現するという新たな探究を始めた。この探究によって彼女は自身の美学を発展させる重要な作品、『私はフランス語を話せない』、『幸福』、『亡き大佐の娘たち』を生み出した。本章はこれらの作品をマンスフィールドが自らの美学を極める前の重要段階とし、作品における"truth"とそれに伴う芸術的發展を明らかにしている。

マンスフィールドは、『私はフランス語を話せない』では「信頼できない語り」によって、『幸福』ではその語りを取り入れた象徴派的表現法によって各主人公の不確実な自己を描いた。『亡き大佐の娘たち』では『前奏曲』と同じ断片的構造と象徴派的表現により、老姉妹の悲しい人生にある一瞬の美を表現した。この作品は「悲劇的認識」を経た人生の受容にある美を描くマンスフィールド美学の最盛期への転換点となった。論者は各作品の"truth"とそのために工夫された表現をテキストに沿って検証している。

<第4章> 死の恐怖と直面していたマンスフィールドは、1921年の夏頃には人生の"truth"の受容によって「あらゆるものへの愛」が得られ、それが生の拠り所となるという信念を持つに至った。そして再び故郷を背景にこの信念を表す一連の作品を書いた。本章ではその中の2作品『海辺にて』と『園遊会』を取り上げ、マンスフィールドがどのように人生の"truth"の受容とその美を描き、人生を喚起させる世界を創り上げたかを考察し彼女が極めた美学を検証している。

『海辺にて』は『前奏曲』の続編である。この作品でもマンスフィールドは断片的構造と"moment"を中心とする象徴派的表現法を用いているが、人生を一日になぞらえるモダニストの手法を取り入れ作品全体を包むイメージとして海を配置し統一性を強めている。家族の一日は「人生の盛衰」を映し出すが、Lindaがそれを不可避な"truth"として受容する"moment"に美が現れる。このことを検証することによって論者は『海辺にて』をマンスフィールドの人生の「賛歌」とみなしている。

『園遊会』もマンスフィールドの思い出に基づいているが、思春期の少女 Laura の園遊会の日の経験の物語である。この作品でも一日は人生を思わせるが、Laura が日中の経験を経て死者と対面し、様々な事が同時に起こる「人生の多様性」という"truth"を発見するまでの行程でもある。彼女の意識に同化する語りと一連のイメージは、その発見の"moment"へと見事に導かれている。『海辺にて』の Linda のように Laura の発見した"truth"は悲しいものであるが、それ故に得られる美が人生を肯定する。彼女が辛い人生を終えた男に見いだす美と満足によってこの作品は前作より明確な人生の「賛歌」となっており、読者の内により一層"truth"を喚起する。論者は"moment"を導くイメージを重視し作品を

分析することによって、マンスフィールド美学の極致を検証している。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 長 尾 輝 彦

副 査 教 授 山 田 貞 三

副 査 教 授 高 橋 英 光

学 位 論 文 題 名

“To Leave Life on this Earth”: The Development of Katherine Mansfield's Aesthetics

(「この世に人生を残すこと」):

キャサリン・マンズフィールドの美学の発展)

キャサリン・マンズフィールドが世に残したのは5冊の短編集だけであるが、人生の微妙なある一側面を描き出す独特の繊細な小説技法は今なお多くの読者を惹きつけている。審査委員の審査は、その繊細な小説技法の発展過程を綿密にたどった本論文のねばり強い努力を高く評価した。論者は、「人生をこの世に残すため」に人生の真相とその芸術的表現を追い求めた作家であると考え。その観点に立って、2002年に出版されたマンズフィールド研究資料の集大成ともいえる『マンズフィールド・ノートブック』を最大限に活用して、作者の生涯と作品を克明に跡づけている。

マンズフィールドは1920年代の終わりに、ジョン・ミドルトン・マリーの伝記によって注目を集め、New Criticismが好んで取り上げる短編小説のアンソロジー・ピースになった。その後、これまた時代の流行に従って、伝記や書簡集によってその奔放な私生活が暴かれた結果、伝記的事実に照らした作品解釈がさかんになり、奔放な人生を生きた“New Woman”の作家としてとらえられるようになった。

しかし論者は、『マンズフィールド・ノートブック』の出版によって利用できるようになって資料と、丹念な作品の読みによって、芸術のためにたゆまぬ努力を続けた真摯な作家としてのマンズフィールド像を明らかにして見せている。マンズフィールドの全作品に目を通した後に、作家としての成長の跡を最も明確に物語る6個の作品(マンズフィールドが作家として大きく飛躍した4作品と、晩年に書かれた代表作の2作品)に焦点を当てて論を進め、マンズフィールド特有の直観、感性、そしてその芸術的表現のための工夫や技巧---それを「マンズフィールドの美学」と名づけて、その発展過程を明らかにしている。

適時な『マンズフィールド・ノートブック』の出版がこの論文の執筆を可能にしたとも言えるが、同時にまた、この『マンズフィールド・ノートブック』によって明らかになった伝記的事実を最大限活用することを可能にしたのは、論者の長年にわたる

マンスフィールド研究の成果であったと言える。すぐれた作品と、それを生み出した作家のいずれがより重要であるかは、難しい問題であるが、最終的には、人ではなく作品の方に力点を置くのが正しい文学研究の立場である。本論文の論者はマンスフィールドの生涯にそって発展過程をたどるという形をとっているが、各作品について行った克明な解釈と鑑賞にその最大のメリットを持っており、この点で、今後のマンスフィールド研究のあるべき姿を示したといえる。「マンスフィールドの美学」と言うからには、何らかの客観的な美学理論の枠組みを組み立ててより説得力のあるものに下法がよかったとも言えるが、それは今後の課題と言うべきである。

英米文学の作家を取り上げて論文を書く場合には、英語で書くことが求められていて、その英語の表現力も審査の大きな比重を占めているが、この点でも、論者の英語は、間違いのない正確な英語であり、問題はなかった。

審査担当者は、学位申請者に対する口述試験を含め、前後5回に及ぶ審査委員会をもち、入念な審査を重ねた。口述試験に臨んだ学位申請者の受け答えは、長年のマンスフィールド研究に培われた博識に支えられ、自信に満ちた堂々としたものであった。これらの審査の末に、審査担当者は、本論文が、長年にわたる研鑽と熟慮の成果を展開したものであり、博士(文学)の学位の水準を十分に満たすものであるという点で、意見の一致を見、その旨の報告を研究科教授会に対して行った。